

松の葉

泉鏡太郎

青空文庫

「團子が貰ひたいね、」

と根岸の相坂の團子屋の屋臺へ立つた。……其の近所を用

達があつた歸りがけ、時分時だつたから、笹の雪へ入つて、

午飯を済ますと、腹は出來たし、一合の酒が好く利いて、ふら

くする。……今日は歸りがけに西片町の親類へ一寸寄ら

う。坂本から電車にしようとして、一度、お行の松の方へ歩行き

かけたが。——一度蕉園さんが住んで居た、おまじなひ横

町へ入らうとする、小さな道具屋の店に、火鉢、塗箱、茶

碗はん、花活はないき、盆ぼん、鬱金うこんの切きの上に古ふるい茶碗ちやわん、柱はしらにふツさりと

白しろい拂子ほつすなどの掛かつた中に、掛字かけじが四五幅しごふく。大分古だいぶんふるいのがあるの

を視みた、——こゝ等らには一組ひとくみぐらゐりさうな——草雙紙くさぎょうしで

ない、と思おもひながら、フト考かんがへたのは此この相坂あひざかの團子だんごである。

——これから出掛でかける西片町にしかたまちには、友染いうぜんのふつくりした、人に

形かたちのやうな女をんなの兒こが二人ふたりある、それへ土産みやげにと思おもつた。

名物めいぶつと豫かねて聞きく、——前まへにも一度いちど、神田かんだの叔父おぢと、天王寺てんわうじ

を、其その時は相坂あひざかの方ほうから來きて、今戸邊いまどあたりへ、途中とちゆうを、こゝで

憩やすんだ事ことがある。が、最もう七八年ねんにもなつた。——親おやと親おやとの許い

嫁ひなづけでも、十年じふねん近く雙方さうほう不沙汰ぶさたと成なると、一寸ちよつと様子やうすが分わか

り兼かねる。況いはんや叔父おぢと甥をひとで腰掛こしかけた團子屋だんごやであるから、本郷ほんがうに

住んで藤村の買物をするやうな譯にはゆかぬ。

第一相坂が確でない。何處を何う行くのだつけ、あやふや

なものだけれど、日和は可し、風も風ぎ、小川の水ものんどりと

して、小橋際に散ばつた大根の葉にも、ほかくと日が當る。

足にまかせて行け、團子を買ふに、天下何の恐るゝ處かこれあら

ん。

で、人通りは少し、日向の眞中を憚る處もなく、何しろ、

御院殿の方へ眞直だ、とのん氣に歩行き出す。

笹の雪の前を通返して、此の微酔の心持。八杯と

腹に積つた其の笹の雪も、颯と溶けて、胸に聊かの滯もない。

やがて、とろくの目許を、横合から萌黄の色が、蒼空の

其それより濃こく、ちらりと遮さへぎつたのがある。蓋けだし古樹ふるきの額形がくがたの看かん板ばんに刻きざんだ文字もじの色いろで、店みせを覗のぞくと煮山椒にざんせうを賣うる、これも土地ちの名物めいぶつである。

通とほりがかりに見みた。此この山椒さんせうを、近頃ちかごろ、同じ此この邊あたりに住すまる、上野うへのの美術學校びじゆつがくかう出での少わかい人ひとから手土産てみやげに貰もらつた。尚なほ其その人ひとが、嘗かつて修學旅行しうがくりよかうをした時とき、奈良ならの然さる尼寺あまでらの尼あまさんに三體さんたい授さづけられたと云いふ。其その中なかから一體いつたい私わたしに分わけられた阿羅漢あらかんの像ざうがある。般若湯はんんにやたうを少すこしばかり、幸さいひ腥なまぐさを口くちにせぬ場合ばあひで、思おもひだすに丁ちやうど可いい。容姿端麗ようしたんれい、遠とほく藤原氏時代ふぢはらしじだいの木彫きぼりだと思き聞きくが、細ほそい指ゆびの尖さきまで聊いさか缺かけ損そんじた處ところがない、すらりとした立像りつざうの、其その法衣ほふえの色いろが、乃いまし瞳ひとみに映うつつた其その萌黄もえぎなのである。

ほんのりとして、床しく薄いが、夜などは灯に御目ざしも黒く清しく、法衣の色がさま／＼と在すが如く幽に濃い。立袈裟は黒の地に、毛よりも細く斜に置いた、切込みの黄金が晃々と輝く。

其の姿を思つた。

焼芋屋の前に床几を出して、日向ぼつこをして居る婆さんがあつた。

店の竈の上で、箆の目を透すまで、あかくと日のさした處は、焼芋屋としては威嚴に乏しい。あれは破れるほどな寒い晩に、ぱつといきれが立つに限る。で、白晝の焼芋屋は、呉竹の里に物寂しい。が、としよりの爲には此の暖な日和を祝する。

「お婆さん、相坂へ行くのは、」
「直き其の突當りを曲つた處でございますよ。」
と布子の半纏の皺を伸して、長閑さうに教へてくれた。

二

其を、四五軒行つた向う側に、幅の廣い橋を前にして、木戸に
貸屋札として二階家があつた。四五本曲つたり倒れたりだが、
竹垣を根岸流に取まはした、木戸の内には、梅の樹の枝振り
の佳いのもあるし、何處から散つたか、橋の上に柳の枯葉も風情
がある。……川も此の邊は最う大溝で、泥が高く、水が細い。

あまつさ ぼうぎれ、たけかは
 剩へ、棒切、竹の皮などが、ぐしやくと支へて、空屋の前は
 ことさら そながれよど まこと ひとす けむかべ も
 殊更に其の流も淀む。實や、人住んで煙壁を洩るで、……誰も
 居ないと成ると、南向きながら、日ざしも淡い。が、引越すと
 すれば難には成らぬ。……折から家も探して居た。
 はひ 入つて見よう……今前途を聞いたのに、道草をするは、と
 き 氣がさして、焼芋屋の前を振り返ると、私に教へた時、見返つ
 た、其のまゝに、外を向いて、こくりくと然も暖とさうな懐
 ろで 手の居睡りする。後生樂な。嫁御もあらば喜ばう……近所
 よ も可し、と雪にも月にも姿らしい其の門の橋を渡懸けたが、忽
 ち猛然として思へらく、敷金の用意もなく、大晦日近くだ
 し、がったり三兩と、乃ち去る。

婆ばあさんに聞きいた突つき當あたりは、練ねり堀べいか、高たかい石いしの堀へい腰ごしらしか
 つたが、其それはよく見みなかつた。ついで曲まがると、眞ま晝つ間の幕まくを衝つ
 と落おとした、舞臺ぶたい横手よこてのやうな、ずらりと店みせつきの長ながい、廣ひろい平屋ひらや
 が、名代なだいの團子屋だんごや。但たゞし御酒肴おんさけさかなとも油障子あぶらしやうじに記しるしてある。
 案あんずるに、團子だんごは附燒つけやきを以て美味うまいとしてある。鹽煎餅しほせんべい以
のかた來、江戶兒えどっこは餘あまり甘あまいのを好すかぬ。が、何なにを祕かくさう、私わたしは團子だんご
 は餛あんの方ほうを得意とくいとする。これから土産みやげに持もつて行く、西片町にしかたまちの
いうぜん友染ゆうぜんたちには、どちらが可いいか分わからぬが、しからず、己おのが好このむ處ところ
 を以もつてせんには、と其處そこで餛あんのを逃あつらへた。
 障子しやうじを透すかして、疊たゝみ凡よそ半疊はんでふばかりの細長ほそながい七輪しちりんに、
 五いつつづゝ刺さした眞白まつしろな串團子くしだんごを、大福帳だいふくちやうが權化ごんげした算そろば

盤ごの如ごとくずらりと並ならべて、眞ま赤つな火ひを、四角しかくな團扇うちばで、ばた／＼
 ばた、手拍子てびやうしを拍うつて煽あふぐ十五六やつこの奴やつこが、イヤ其その嬉うれしいほ
 ど、いけずな體ていは。

襟えりからの前垂まへだれ幅はびろ廣やつな奴やつを、遣放やりばなしに尻しりさ下がりに緊しめた、

あとのめりに日和下駄ひよりげたで土間どまに突立つたち、新あたしいのを當あてがつても半は

日んにちで駈かけ破やぶる、繼つぎだらけの紺足袋こんたび、膝ひざツきり草色くさいろよれ／＼の

股引もゝひきで、手織木綿ておりもめんの尻端折しりはしより。……石いし頭あたまに角かどのある、大おほ

出額でこで、口くちを逆さかのへさかの字じに、饒おし舌やべりをムツと揉もみ堪こたへ、横撫よこな

でが癖くせの鼻頭はなさきをひこつかせて、こいつ、日暮里につほりの煙けむりより、何處どこ

かの鰻うなぎを嗅かぎさうな、團栗眼どんぐりまなこがキヨロリと光ひかつて、近所きんじよの

犬いぬは遠とほくから遁にげさうな、が、搔垂眉かいだれまゆのちよんぼりと、出張でばつ

た額ひたひにぶら下さがつた愛嬌あいけう造り、と見ると、なきいちえふ一葉がたけくら

べの中の、横よこ町の三五郎さんごろうに似て居る。

人を見つると、顔かほを曲まげて、肩かたを斜はかひにしなから、一息ひといき、ば

たく、ばツと團扇うちばを拍たく。

「餡子あんこのは——お手間てまが取れますツ。」

「ぢや、待またうよ。」

と障子しやうじを入はつて、奴やつこが背せに近ちかい土間どまの床几しやうぎにかけて、……

ふたつ、みあつち
一一包ひとつか 逃にげへた。

ところ、入いれ違ちがひに一人屋臺ひとりやたいへ來きた。

「七錢ななせんだけ下くださいな。」

奴やつこ、顔かほを曲まげ、肩かたを斜なめにしながら、一息ひといきばたく、團扇うちばをば

ツばツと煽いで、

「餌子のお手間が取れますツ。」

「然う、」

と云つて其處に立つて考へたのは、身綺麗らしい女中であつ

たが、私はよくも見なかつた。で、左の隅、屋臺を横にした處で、

年配の老爺と、お婆さん。女が一人、これは背向きで、

三人がかり、一ツ掬つて、ぐい、と寄せて、くるくると餡をつ

けて、一寸指で撓めて、一つ宛すつと串へさすのを、煙草を飲み

ながら熟と見て居た。

時に、今來た女中の註文が、何うやら餡子ばかりらしいの

で、大に意を強うして然るべしと思つて居ると、

「では、最^もう些^{ちつ}と經^たつて來^きませうね。」
 と一度^{いちど}、ぶらりと出^だした風呂敷^{ふろしき}を、袖^{そで}の下^{した}へ引込^{ひっこ}めて、胸^{むね}を抱^だ
 いて、むかうを向^むく。

「へーい、」

と甲^{かんばし}走^{こゑ}つた聲^あを浴^{やつこ}びせて、奴^{うち}また團扇^{うちは}を、ばたく、ばつと
 煽^{あふ}ぐ。

三

手際^{てぎは}なもので、煽^{あふ}ぐ内^{うち}に、じり／＼と團子^{だんご}の色^{いろ}づくのを、十四^{じふし}
 五本^{ごほん}掬^{すく}ひ取^とりに、一^{ひとつ}掴^{つか}み、小口^{こぐち}から串^{くし}を取^とつて、傍^{かたはら}に醬油^{しょうゆ}の井^い

へ、どぶりと浸つて、颯と捌いて、すらりと七輪へ又投げる。
 直ぐに残つたのに醬油をつける。殆ど空で、奴は、此の間に例の、
 目をきよろつかせる、鼻をひこつかせる、唇をへし曲げる。石
 頭を掉る、背ごすりをする、傍見をする。……幾干か小遣が
 あると見えて、時々、前垂の隙間から、懷中を覗込んで、ニヤリと遣る。

いけずがギビくした事は……私は何故か嬉しかった。
 客は私のほかに三人あつた。其の三人は、親子づれで、九
 ツばかりの、緋の羽織に同じ衣服を着た優しらしい男の兒。――
 見習へ、奴、と背中を突いて遣りたいほどな、人柄なもので。
 母親は五十ばかり、黒地のコートに目立たない襟巻して、

質じみ素みなりな服姿みなりだけれど、ゆつたりとして然しかも氣輕きがさうな風采とりなり。古こ
 風ふうな、薄うすい、小ちひさな鬚まげに結ゆつたのが、唐から銅かねの大おほきな青あを光あをりのす
 る轆轤ろくろに井戸繩ゐどなはが、づつしり……石いしづき築ほりの掘井戸みど。それが、廂ひさしの
 下したにあの傍かたはらの床しやうぎ几ぎに、飛とび石いし、石燈籠いしどうろうのすつきりした、綺麗きれい
 に掃はいて塵ちりも留とめず廣ひろ々／＼した、此この團子屋だんごやの奥おく庭にはを背後うしろに
 して、膝ひざをふつくりと、きちんと坐すわつて、頭つむりに置おきて手拭ぬぐひをしなが
 ら、女をんな持もちの銀煙管ぎんぎせるで、時とき々／＼、庭にはを指さし、空そらの雲くもをさし
 などして、何なにか話はなしながら、靜しづかに煙草たばこを燻くゆらす。
 對さしむか向むかひに、一ちよい寸せな背ひねを捻ひねつた、片手かたてを敷しきすべ
 に支ついて、すらりと半身はんしん、棲つまを内搔うちがいに土間どまに揃そろへた、九くか二は
 十たちと見みえた、白足袋しろたびで、これも勝色かついろの濃こいコートを姿すがたよく着きた

が、弟を横おとうとよこにして、母おつかさん様の前まへであるから、何なんの見得みえも、色氣いろけもなう、鼻筋はなすぢの通とほつた、生際はえぎはのすつきりした、目めの屹きつとして、眉まゆの柔やさしい、お小姓こしやうだちの色いろの白しろい、面長おもながなのを横顔よこがほで、
 — 團子だんごを一ひとくしこゆび串小指はを撥くちびるあねて、唇あに當あてたのが、錦繪にしきゑに描かいた野のがけの美人びじんにそつくりで、微醉ほろゑひのそれ者しやが、くろもじを嚙かんだより婀娜あだツぽい。髪かみは束髮そくはつに、白しろいリボンおほを大おほきく掛かけたが、美子みいこも喜きいちやんも爲すなる折をりから、當人たうにんなに何なんの氣きもなしに世よと々ともに押移おしうつつたものらしい。が、天てんの爲なせる下町したまちの娘むすめふ風うは、件くだんの髪かみが廂ひさしに見みえぬ。……何處どこともなしに見みる内うちに、潰つぶしの島田しまだに下村しもむらの丈長たけながで、白しろのリボンなんが何なんとなく、鼈甲べつかふの突つき通とほしを、しのぎで卷まいたと惚しのばれる。

此の娘も、白地の手拭を、一寸疊んで、髪の上に載せて居る、
 鬢の色は尚ほ勝つて、ために一入床しかつた。

が、其の筈で、いけずな奴が、焼團子のばたくで、七輪

の尉を飛ばすこと、名所とはいひがたく雪の如しであつたから。

母様が、膝を弾いて、ずらりと、ずらすやうに跨いで下り

ると、氣輕にてくくと土間を來た。

「其では、土産の包を何うぞ。」と奴に言ふ。

「へーい。」

すどんきような聲を出し、壓へたり、と云ふ手つきで、團

扇を挟んで、仰向いた。

「二十錢のを一ツ、十五錢のと、十錢のと都合三包だよ

「餡あんこ子ならお手間てまが取とれますツ。」

と、けろりとして、ソレ、ばたくばた、ばツばツばツ。

「皆みんな附つけ焼やきの方ほうさ。」

「へーい。」

「ぢや、分わかつたかね。」

と一寸前ちよいまへを通とほる時とき、私わたしに會あ釋しやくして床しやうぎ几かへへ返かへつた。

いしくも申まをされた。……残のこらずつけ焼やきのお詔あつらへは有あり難がたい、と

思おもふと、此この方目ほうめのふちを赤あかくしながら、餡あんこばかりは些ちよと擦すぐつたい。

また其その餡あんがかりの三さん人にんの、すくつて、引ひいて、轉ころがして、

一ひとツ捻ひねつてツイと遣やるが、手てを揃そろへ、指ゆびを揃そろへて、卜た撓ためて刺さす

時、胸を据ゑる處まで、一様に鮮かなものである。が、客が待
 たうが待つまいが、一向に頓着なく、此方は此方、と澄し
 た工合が、徳川家時代から味の變らぬ頼もしさであらう。

四

處へ、カタ／＼と冷たさうな下駄の音。……母ぢや人のを故と
 穿いて來たらしい、可愛い素足に三倍ほどの、大な塗下駄を打
 つけるやうに、トンと土間へ入つて來て、七輪の横へ立つた、
 十一二だけでも、九ツぐらゐるな、小造りな、小さな江戸の姉さ
 んがある。縞の羽織の筒袖を細く着た、脇あけの口へ、腕を曲

げて、些ちつと寒さむいと云いつた體ていに、兩手りやうてを突つ込み、ふりの明あいた處ところ
 から、赤あかい前垂まへだれの紐ひもが見みえる。其處そこへ風呂敷ふろしきを肱ひぢなりに引ひ挾はさ
 んだ、色いろの淺あさぐろ黒くろい、目めに張はりのある、きりゝとした顔かほの、鬢びんを引ひ
 緊きしめて、おたばこ盆ぼんはまた珍めづらしい。……

「五錢頂戴ごせんちやうだい。」

「へーい。」

「さあ、」

と片手かたてを出だして、奴やつこに風呂敷ふろしきを突つきつけると、目めをくるりと天てんじ
 井覗やうのぞきで、

「餡子あんこならお手間てまが取とれますツ。」

「あら、焼やいたのだわよ、兄にいさん。」

とすつきり言つた。

奴、一本參つた體で、頸を疎め、口をゆがめて、餡をつける
 三人の方を、外方にして、一人で笑つて、

「へーい。」

と七輪の上を見計らひ、風呂敷を受取つて、屋臺へ立ち、大
 皿からぶツくと煙の立つ、焼きたてのを、横目で睨んで、竹
 の皮の扱きを入れる、と飜然と皮の撥ねる上へ、ぐいと尻ツ撥ね
 に布巾を掛ける。

障子の外へすつと來て、ひとり杖を置いて立つた翁がある。

白木綿の布子、襟が黄色にヤケたのに、單衣らしい、同じ白
 の襦袢を襲ね、石持で、やうかん色の黒木綿の羽織を幅

廣ひろに、ぶわりと被はつて、胸むねへ頭陀袋づだぶくろを掛かけた、鼻はなの隆たかい、赭あから顔がほで、目めを半眼はんがんにした、眉まゆには黒くろも交まじつたけれど、泡あわを塗なすつた體ていに、口許くちもとから頤おとがひへ、短みじい髻かひげは皆みな白しろい。鼠ねずみのぐたりとした帽ぼう子うしを被かぶつて、片手かたてに其その杖つゑ、右みぎの手首てくびに、赤あか玉だまの一連いちれんの數珠じゆずを輪わにかけてのひと、一つの鐸りんを持もち添そへて、チリリリチリリと、大おほき手きてを振ふつて鳴ならし、

「なうまくさんまんだばさらだ、なうまくさんまんだばさらだ、
 南無成田山不動明王なむなりたさんぶどうみやうわうをはじめ奉たてまつり、こんがら童子どうじ、せいたか童子どうじ、甲童子かどうじ、乙童子おつどうじ、丙童子へいどうじ、いばらぎ童子どうじ、酒吞童子しゆてんどうじ、其そのほか數々かずく二十四童子にじふしどうじ。」

と、丁ど私ちやうわたしと向むき合あひに、まともに顔かほを見みる處ところで、目めを眠ねむるや

うにして爽かに唱へた。

私が懐の三つ巻へ、手を懸けた時であつた。

「お進せ申せ。」

と、向うで餡をつけて居た、其のお婆さんが聲を懸ける。

「へーい。」と奴が、包んだ包みを、ひよいと女の兒に渡しなが

ら、手を引込めず、背後の棚に、煮豆、煮染ものなどを装並べ

た棚の下の、賣溜めの錢箱をグワチャリと鳴らして、銅貨を

一個、ひよい、と空へ投げて、一寸掌へ受けながら持つて出る。

前後して、

「はい、上げます。」

と緋の衣服の、あの弟御が、廂帽子を横ツちよに、土間

にかけあし 駢足おつかさんで、母つかひ様の使きに來て、伸のび上あるやうにして布施ふせする手てから、大柄おほがらな老道者らうだうじやは、腰こしを曲まげて、杖つゑを持もつた掌たなそに受うけて、奴やつこと兩方りやうほうへ、……二度頂にどたゞく。

私わたしも立たつた。

氣きの寄よる時ときは、妙めうなもので……又また此處こゝへ女一連をんせんとつれ、これは丸顔まるがほの目めのぱつちりした、二重ふたへまぶた瞼あひけうの愛嬌あいけうづいた、高島田たかしまだで、あらい棒ぼうじま縞めいせんの銘仙はおりの羽織あゐ、藍かの勝かつた。——着物きものは、茶ちやの勝かつた、同おなじやうな柄がらなのを着きて、阿母おふくろのおかはりに持もつた、老としよ人りじみた信玄しんげん袋ぶくろを提さげた、朱鷺色ときいろの襦袢じゆばんの蹴出けだしの、内うち端ちわながら、媚なまめかしい。十九じゅうきゅうにはなるまい新姐しんぞを前さきに、一足ひとあしさがつて、櫛卷くしまきにした阿母おふくろがついて、此この店みせへ入はいりかけた。が、

ちやう
丁ど 行 者 の 背後を、 斜に取まはすやうにして、 二人とも立停
まつた。

五

「お前、細いのはえ？」

と阿母が言ふ。

「あい、」と頤を白く、 浅葱の麻の葉絞りの半襟に俯向いた。

伏目がふつくりとする……而して、 緋無地の背負上げを通して、

めりんすの打合はせの帯の間に、これは又よそゆきな、 紫鹽

瀬の紙入の中から、横に振つて、出して、翁に與へた。

道者だうじやは、杖つゑを地つちから離はなして、手てを高たかく上あげて禮れいしたのである。
 時ときに、見みるもいたいたいけだつたのは、おたばこぼんの小姉ちひねえさん。
 先刻さつぎから、人ひと々／＼の布施ふせするのと、……もの和やはらかな、翁おきなの
 顔かほの、眞白まつしろな髯ひげの中なかに、嬉うれしさうな唇くちびるの艶つや々／＼と赤あかいのを、熟じつ
 と視ながめて、……奴やつこが包つつんでくれた風呂敷ふうろしきを、手ての上うへに据すゑたまゝ、
 片手かたてを服きものの中なかへ入いれて、其それでも肌薄はだうすな、襦袢じゆばんの襟えりのきちん
 として、赤あかい細ほそいのも、あはれに寒さむさうに見みえたのが、何なんと思おもつ
 たか、左手ゆんでを添そへて、結むすび目めを解といて、竹たけの皮かはから焼團子やきだんご、ま
 だ、いきりの立たつ、温あたいのか、温ふたくしと、例れいの塗下駄ぬりげたをカタノ
 くと——敷居際しきみぎはで、

「お爺ぢいさん、これあげませう、おあがんなさいな。」

と出した時、……翁の赭ら顔は、其のまゝ溶けさうに俯向いて、

目をしばたゝいた、と見ると、唇がぶるゝと震へたのである。

床几の娘も肩越に衝と振向いた。一同、熟と二人を見た。

「南無御一統、御家内安全。まめ、そくさい、商賣繁昌

。」

と朗かな聲で念じながら、杖も下さず、團子持つたなりに額に

かざして、背後は日陰、向つて日向へ、相坂の方へ、……冷め

し草履を、づるりと曳いて、白木綿の脚絆つけた脚を、とぼ

くと翁は出て行く。

「や、包みなほして上げようぜ。」

と、徳は孤ならず、ちよろつかな包み加減。抜いた串に皮が開

いて、ちひねえ小姉のて手の上うへにひるがへひるがへにひつたくひつたく引奪るやうに
 取つて、やつこ奴はやたい屋臺で、しなほ爲直しながら、

「えゝ……まけて置け、いちばん一番。」と、さら皿からねぢ捻るやうにひつつか引摘
 んで、べつ別にやきだんご焼團子をいづくし五串そ添へた。

「こゝ此處へも、だんごお團子をくだ下さいな。」
 とくしまき櫛卷のおふくろ阿母がつよ衝と寄つた。

きよろりとみむ見向いて、

「あんこ餡子ならてまお手間がと取れますツ。」とまたあふむ又仰向く。

「いゝえ否、や焼いたのですよ。」

「へーい。」とあひ相かはらずつっぱし突走る。

「じっせん十錢のをふたつゝみ一一包、ふたつゝみ一一包ですよ——い可いかい。それ其から、

十五錢じふごせんのを一ひとつ包づみ、皆みな焼やいたのをね。」

「へーい、唯ただ今いま。」

「否いゝえ、歸途かへりで可いいのよ。」

「へーいッ」

「あのね、母おつかさん様さま。」と、娘むすめがあたりを兼かねた體ていで、少すこし甘あまえ
るやうに低聲こゝろゑで言いつた。

「然さう……では其その十五錢じふごせんのなかへ、餡あんのを交ませて、——些ちつと
で可いいの。」

「些ちつと、」

と口眞似くちまねのやうに繰返くりかへして、

「へーい。」

「さあ、それぢやおまるりをして來ようね。」

「あい、」

と言つて、母娘二人、相坂の方へ、並んで向く。
 餡がかりは澄ましたもので、

「家内安全、まめ、そくさい、商賣繁昌、……だんご大
 切なら五大力だ。」と、あらう事か、團子屋の老爺さまが、
 今時取つて嵌めた洒落を言ふ。

「何を言はつしやる。」と……お婆さんは苦笑した。

あの、井戸の側を、庭を切つて裏木戸から、勝手を知つて來た
 らしい。インキの壺を、ふらここの如くに振つて、金釦にひ
 しゃげた角帽、かまひつけぬ風で、薄髯も剃らず遣放しな、

威勢あせいの可いい、大學生だいがくせいがづかくと入はつて來きた。

「いや、どつこいしよ。」

と——あの弟おとうとが居ある、其その床しやうぎ几すみの隅こしに腰なげを投お下ろすと、

「おい、餡あんのを一ひと盆ぼん。……お手間てまが取とれます、待まつてらつしやい。」

と恐おそろしく鐵拐てつかに怒鳴どなつて、フト私わたしと向合むきあつて、……顔かほを見みて：
 雙方さうほう莞爾につこりした。同好どうかうの子しよ、と前方さきで思おもへば、知己ちきなるかな、と言いひたかつた。

いや、面喰めんくらつたのは奴やつこである。……例れいに因よつて「お手間てまが取とれますツ。」を言いはない内うちに、眞向まつかう高飛車たかびしやに浴あびせられて、
 「へーい、」とも言いひ得えず、鳶とんびに攫さらはれた顔がん色しよく。きよとんと

して、ちひねえ 小姉ふたに再び其そつの包みを渡すと、黙だまつて茶ちやを汲くみに行く、石い
しあたま 頭あたまのすくんだ、——背せの丸まるさ。

「しばらく、——お二人ふたりしばらく。」

と後あとじさりに、——いま出でて行く櫛く巻しまきと、島田しまだの母娘おやこを呼留よびと
 めながら、翁おきなの行ぎやう者じやが擦すれちが違ちがひに、しやんとして、逆ぎやくに戻もどつ
 て來きた。

店頭みせさきへ、恭うやくしく彳たらず、四邊あたりを見みながら、せまつた聲こゑで、

「誰どなた方なたもしばらく。……あゝ、野山のやまも越こえ、川かはも渡わたり、劍つるぎの下したも
 往來わうらいした。が、生うまれて以この來かた、今日けふと云いふ今日けふほど、人ひとの情なさけの
 身みに沁しみた事ことは覺おぼえません。」と、聲こゑが途絶とだえて、チリりんくと鐸りん
 が鳴なつた。

溜息ためいきを深くふか、吻ほと吐ついて、

「私はわし行者ぎやうじやでも何なんでもないのぢや。近頃ちかごろまで、梅暮里うめぼりの溝みぞ

へ出でて、間まに合せあはの易えきを遣やつて居ゐましたが、好きすなどぶろくのた

しにも成ならんで、思おもひついた擬まがひぎやうじや行者ぎやうじやぢや。信心しんじんも何なにもな

かつたが、なあ、揃そろひも揃そろつた、あなたがたのお情なさけ——あの娘こも

聞きかつしやれ。」

と小姉ちひねえに差出さしだした手てがふるへて、

「老人らうじんつく／＼み身に染しみて、此このまゝでは、よう何どうも、あの

踏切ふみぎりが越切こしきれなんだ。——

あらためて、是これから直すぐに、此この杖つゑのなり行脚あんぎやをして、成なりた

田山さんへ詣まうでましてな。……經きやう一口ひとくちも知らぬけれども、一いちね

念んに變かはりはない。なむなりたさんふどうみやうわう南無成田山不動明王、ひとへとなと偏ひとへに唱なへて、あな
 た方がたの御運ごうんちやうきう長久ちやうきう、無事ぶじそくさい、また又お若い嬢わかぢやうたちの、
 とほろりとして、老おいの目めに涙なみだを湛たへ、
 「行末ゆくすゑの御良縁ごりやうえんを祈願きぐわんします、祈願きぐわんしまする。」

明治四十三年一月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「松《まつ》の葉《は》」とルビがついていません。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

松の葉

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>